

シンポジウム 19：がん在宅の未来～地域で支えるためにできること～

演題名	きずなでつむぐ地域緩和ケア
-----	---------------

概要

こころざし半ばで病気と向き合うことになった方、平和な社会を築いてくださった高齢の方に、残されている大切な時間を住み慣れた地域で自分らしく過ごしていただきたい。そう願う一方で、「がん終末期を診る在宅医の確保が難しい」、「緊急対応を引き受ける病院の確保が難しい」と病院医療側・在宅医療側それぞれがジレンマを抱え、患者・家族そして医療者ももどかしい時間を過ごしている。

当法人は、病院（一般病床 99 床）と、複数の在宅療養支援診療所を有する。これらを活かすことで地域が抱えるジレンマにアプローチする方法がないだろうかと模索してきた。そして、オーストラリアの地域緩和チームからヒントを得て、2013 年 4 月当法人に地域緩和ケアチームが発足した。次第に在宅でも病院でも患者と一緒に伴走し続ける“かかりつけ医”として診療できる基盤が形成されてきた。その結果、揺れ動き続ける患者・家族の希望に迅速に沿いながらシームレスな緩和ケアを提供することが可能になりつつある。

また、チーム活動の大きな柱としてアドバンス・ケア・プランニングを位置づけている。これまでの人生を振り返り、現在を見渡し、そしてこれから生きてゆく上での希望を明らかにしてゆくプロセスが療養の場を超えて継続してゆくように工夫をしている。

これまで国内外の緩和ケアが提供されている現場を見てきたが、一つとして同じものはなく、こうでなければならないという形はなかった。しかし、共通して流れる三つの必要不可欠な要素を見出すことができた。誠実、尊重、そしてコミュニケーションである。これらは患者・医療者間だけではなく、地域の医療を協力して支えてゆく医療機関の間でも同じようになくてはならない要素であると確信している。